AV JOURNAL

1983年3月　第２号

〈テープライブラリーにて〉

目　次

幻のグルジア語……小泉　保…2
同時通訳演習 ―状況報告― ……船山　仲也…4
西ドイツの外国語教育界のいくつかの話題……乙政　潤…6
外国語学習に対する意識調査とＬＬ利用状況について
―アンケート中間報告― ……視聴覚資料係…7
視聴覚教材解題 ―ドイツ語― ……友田　舜三…9
視聴覚教材解題 ―英　語― ……大橋　克洋…10
語劇録画撮りについて……12
テープライブラリー利用者統計……13
〈出版物案内〉……16
編集後記……16

大阪外国語大学

幻のグルジア語

言語学　小泉　保

船の別れはつらいものである。互いに握りしめたテープがプッツリ切れると、祖国の地を離れたという実感がわいてくる。バック・ミュージックに「リンゴの花ほころび川面に霞立ち……」のメロディーが流れていた。そのとき横浜港からナホトカへ向かうソ連のバイカル号の船中にあった。2泊3日の船の旅であったが、波は荒かった。初回は乗客全員が昼食のテーブルに着いたのにナホトカ港での最後の朝食には3分の1しか顔がそろわなかった。

ソ連の船に乗ってまず驚いたのは女性の船員がせわしげに立ち働いていることだった。男女同権の国では当り前のことであるが、しかしモスクワ郊外の鉄道線路で女の線路工夫が諸肌ぬいでヨイトマケをやっていたのはいささか辟易した。当時ソ連では色つきシュミーズが計画生産に入ったらしく、赤・青・黄のシュミーズを着たオバチャン達のたくましい姿を見ていると食欲までなくなってしまった。1970年のことである。

モスクワの空港から飛行機でエストニア共和国の首都タリンへ向かった。第3回国際フィン・ウゴル学者会議に出席するためである。エストニアの有名な音声学者P．アリステ教授が暖かく出迎えてくれた。会場の回りに立ち並んだポールには参加国の旗が翻っていた。その中に日の丸もはためいていたのはうれしかった。

タリンから由緒あるタルトゥ大学へのエックスカーションでは、同大学の東洋学者ヌルメクント教授が付き添ってくれた。教授は中国語の東干（ドンガン）語の権威であり、日本語にも深い関心を寄せていた。

バスの窓から見えるゆるやかな丘陵には黒牛と赤牛が群れていた。このとき私は教授を通して、エストニア語の音声について三段の長さを実修する機会をもった。koli「ごみ」、kooli「学校の」、koooli「学校へ」や lina「布」、linna「市の」、linnna「市へ」という母音と子音に見られる短・長・超長の区別を耳で聞き口で確かめることが出来た。

前述のアリステ教授はすでに1939年ベルギーのゲントにおける国際音声学者会議で、このエストニア語に見られる3段の長さの弁別を提示して、トルベッコイ公爵の音の長さに長・短しか認めない二項的（binary）音韻解釈に反論している。

会議が終わると汽車でラトビア共和国のリガへと南下した。ドイツ風の美しい市であった。ここから飛行機でアルメニア共和国の首都エレバンへ向かった。ところが、ドン川の河口にあるロストフまでくると、エンジンの調子がおかしくなり5時間ほど空港に放置させられた。その間乗客はベンチに坐って黙って辛抱強く待ちつづけるだけで恨みがましい発言はひとこともらさなかった。ただ空港のドアをモンゴル人らしき男女がしきりに出入りするのを見かけた。この付近に在住するカルムクイ族の一味であろう。

しかし、飛行機はカフカス山脈の手前のクラスノダルで完全に調子が狂ってしまった。待合室で夜の10時近くまで待たされたあげく遂に今夜は出発しないから明朝出なおせというラジオ放送があった。隣の席に坐っていたアルメニアの女子学生が英語でその旨を教えてくれた。「あなたは社会人だからホテルに泊るがよい。私はここで夜をあかす」というのである。私は「学生のあなた達こそ格安のホテルがあるだろうに」と尋ねると、「私たち学生のパスポートには途中での事故は認められていない」という説明だった。そこで私は初めてソ連の人達が国内を旅行するのにもビザが必要であることを知った。もちろんクラスノダルの旅館は外国人の私を泊めてくれるはずもなかった。仕方なく飛行場の片隅でまんじりともせず夜を過ごした。

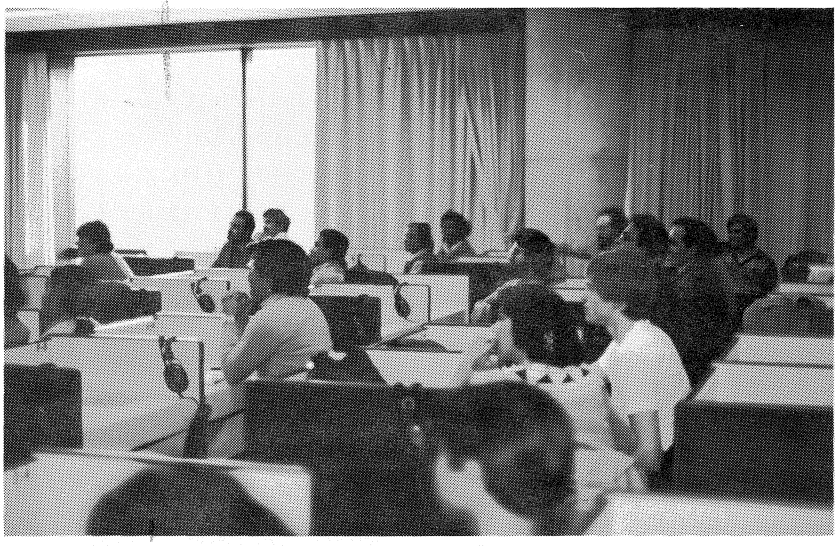
エレバンでは郊外のウラルトゥ遺跡に案内してくれた。ここで発掘された楔形文字によると、エレバンは紀元前782年に創建されたという。従って、アルメニアはソ連邦内では最古の国柄であると自慢して

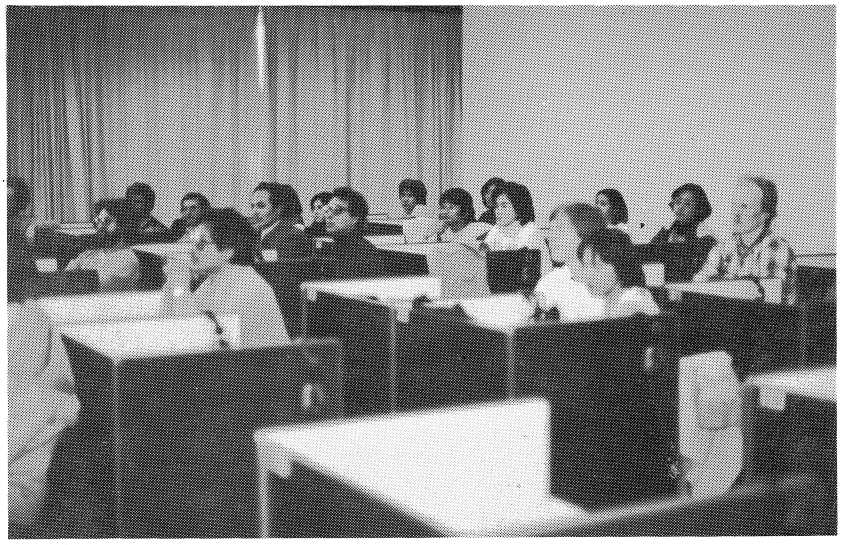
いた。帰りしなにガイドが小高い岡の上から南にそびえる白雪をいただいた山を指差しながら、「あれがノアの箱舟の漂着したアララットの山である」と得意そうに説明してくれた。だが、地理的にはアララット山はトルコ領内に含まれているはずである。とにかく、目が大きく鼻筋の通ったアルメニアの子供たちは皆可愛かった。しかし皮膚は少し黄味を帯びていた。

さて、エレバンからグルジア共和国の首都トビリシを訪れる計画であったのに、あいにくチフスが発生し汽車は不通とのことであった。実は、グルジアでグルジア語の発音を実際に見聞するのがこの旅行の目的であっただけに失望は大きかった。グルジア語の閉鎖子音は無声・有気・声門閉鎖化の3系列がある。その複雑な子音体系を確認しておきたかったのに残念だった。

恨みをのこしてエレバンを立ち去りモスクワへ引き返した。

いま大阪外大の図書館にはチェンケリ（Tschenkéli）の Einführung in die georgische Sprache の第2巻練習問題篇全部を録音したテープが納められている。私はついに幻のグルジア語を耳にすることができた。それは思ったよりも明快な音調であった。





〈ＬＬ教室での留学生授業風景〉

同時通訳演習—状況報告—

英語学科非常勤講師　船　山　仲　也

昭和57年度に開講された同時通訳演習講座（英語科３回生対象）の授業内容の概略を報告したい。

外大においても新しい試みであるし、同時通訳そのものもまだ特殊な分野であるので、ここで予め私自身がどのように同時通訳を特徴づけているかを先ず述べ、その後で具体的に練習方法、教材等について報告することにする。

同時通訳は総合的な技能である。したがって、その基礎演習といっても幅は広い。日本語、英語の語彙を豊富にすることだけでも大仕事であるのに、喋り方も磨かねばならない。すばやく訳語を見つける訓練も当然必要である。下地として、他人の話の要点を的確に把握できることも不可欠である。細かく拾い出せばいろいろな側面があり、それらを全て基礎演習に組み込むのは不可能とさえ思われる。このような同時通訳の特徴と週一コマという時間的制約の中では、授業の年間目標も総花的に諸側面を学生に示すことに落ち着かざるを得ない。

同時通訳がもつ諸側面の中で実際に授業の中で練習に組み込むことができないのは専門的知識の吸収という面である。この点に関しては説明として強調するしかない。つまり、同時通訳の現場を学生に想定してもらうしかない。そもそも同時通訳という通訳形態は国際会議と呼ばれるような場で利用される。そして、国際会議とは何らかの専門家の集まりであり、何らかの専門的な内容を話し合う場である。したがって、会議通訳者の仕事は、何らかの専門分野を扱うものでしかあり得ないことになる。医学にせよ、工学関係にせよ、法律にせよ、その分野の知識がなければ通訳もうまくできない。理想を言えば、原発言者の同等の知識レベルが欲しい。実際にはそれは無理だとしても、ある程度の背景的知識は不可欠である。

このような、予備知識を蓄えるという勉強は授業の中で直接手がけることはできないが、その他の側面については、できるだけ網羅的に演習を組み立てている。以下、代表的な練習項目を順次紹介する。

同時通訳の練習として最も特徴的なものは、「同時リピート」と呼ぶ訓練である。L.L.教室を使用するので、学生は各自ヘッドフォーンから英語のテープを聴くことができる。通常のL.L.の授業では、モデルを聴いた後同じことをリピートするわけであるが、「同時リピート」では学生は聴きながら同時にリピートすることになる。したがって、教材の方は、一連の discourse である。最初の段階では、逆説的に聞こえるかもしれないが、できるだけスピードの速いスピーチを材料にする。内容がつかめなくても、とにかく耳と口を連動させるよう指示するのである。二、三度この練習をした後、少しずつ他の要素を加えていく。たとえば、同時リピートさせるテープの原稿を配り、目からも確認させる。これは、先に原稿を配ってからリピートさせてもよいし、リピートさせてから原稿を配ってもよいだろう。また、スピードの遅いスピーチの同時リピートも行う。その際には内容を把握しながら口を動かすことを要求する。リピートをした後、内容を報告させるのもよいだろう。このように、一口に「同時リピート」といっても、いろいろなやり方がある。それらを適宜組み合わせていく必要がある。

同時通訳をするには反応が速くなければならない。この点は確かにそう言えることであって、先程の「同時リピート」にしても、反応の速さに力点を置いた練習も必要である。しかし、同時通訳にはもう一つの重要な要素があって、その方は一般にはあまりよく理解されていないようである。それは、「記憶」という要素である。同時に訳すといっても厳密に同時に訳せるはずがない。何程かのズレが生じる。日本語と英語の間では語順の違いによるズレも避け難いし、何よりも、原発言者が何を言おうとしているかを捉えるまで情報を蓄めておかねばならない。つまり、聞いてから口に出すまでの「記憶」は絶対に必要なものとなる。これを「短期記憶」と呼ぶならば、

「長期記憶」と呼べるものもある。これは、話の展開の方向をつかむ、という類の情報蓄積である。

「短期記憶」の練習としては、短いニュース記事を用いている。20～50語程の長さの英語ニュースを先ず流し、テープを止めてそのニュースを英語のまま再現させる。最初は歯抜けの文しか出てこないが、何度か繰り返すとほぼ完全な文が再現される。これは語学的訓練として広く行なわれているものであるが、ポイントは、文単位ではなく文章単位で行なう点にある。文章といっても、二、三の文から構成される程度のものであるが、機械的にリピートできるには長過ぎるという程度の長さがなければならない。つまり、各単語が各文中で担っている成分的役割や、意味的な因果関係のような情報を記憶させるようにするのである。そのような把握のし方をしなければ、いくつかの文連続をすぐに覚えてしまうことは難しいはずである。

「長期記憶」が直接関係するのは、逐次通訳である。同時通訳と逐次通訳は密接に絡み合っているものではあるが、授業では同時通訳に集中することにし、「長期記憶」のための練習は割愛している。

同時通訳の練習の柱となるのは「速訳」である。英語から日本語への練習を中心に行なっている。その名の通り速く訳す訓練である。地味な練習であり、音を使わないので、ややもすると講読のようなスタイルになる。たとえば文学作品の講読と違う点は、表現ははるかに簡単であるが、時間を限るところにある。時間を限るためには、学生Aが訳を声に出している時、隣りの学生Bにオリジナルをやはり声を出して読ませればよい。そして、オリジナルが終わるか終わらないかの内に訳を終えよと指示するのである。これは、国際会議などでも実際に起こり得る状況である。通訳者達はこれを「原稿読み」と呼んでいる。

うまい「速訳」をするためには若干のコツを会得する必要がある。耳で情報をキャッチしていく同時通訳と同じ様に、目でテキストを追う時も、行ったり来たりしてはいけない。頭の方から訳す工夫をしていく必要がある。もっともそれが度を越してはいけないが。

以上に述べたような訓練が代表的なものである。いろいろなバリエーションやその他の練習方法もあるが、細かくなり過ぎるので、ここでは省略する。

また、知識面の学習としては、会議用語や時事用語を覚えたりすることもしているが、ここでは言及するに止めておく。

毎時間のパターンとしては、先ず10～30分程、講義の形で練習の方法、目標、注意点などを説明し、それから練習に入る。何度か繰り返す練習については、1時限の中で、2、3のそのようなタイプの練習を盛り込む。2度ディシジョン・ルームを使った以外は、L.L.教室を使っているので、1時限の中でできるだけ変化をもたせるよう努めている。学生が20～30人いるので、なかなか細かくモニターすることができない。モニターができないということは学生側も余り緊張しないということになるはずであるから、少しでも変化をつけて緊張感を高めたいと思っている。

同時通訳演習の授業を担当していて感じる難しさの一つは、やはり教材の選択である。ヒアリングの練習のために選んだテープが難しく十分に所期の練習目標を達成することができなかったこともあった。しかし、その時点その時点にふさわしいレベルの材料を選ぶことも大切ではあるが、時には背伸びをさせることも必要であろうし、できるだけ生（ナマ）の材料を使いたい。つまり、教材として製作されたものには現場の息吹きというものが感じられないように思われる。同時通訳という作業は飽くまでも生生しい人間のコミュニケーションの場で遂行されるものでしかないし、その点もまた学生に伝えたいところである。

以上、断片的な記述ではあるが、どのような考えからどのような授業を行なっているかが概略にせよ伝わったならば幸いである。週一コマという制約と、同時通訳そのものの難しさとを考え合わせれば、一年間の履習で各学生の力がどれ位伸びるかについては悲観的になるのも無理からぬこととせねばならないだろう。しかし、同時通訳の諸側面を学生に直に体験させるという今の目標に満足することなく、更に効率の良い授業展開を行なっていきたいと思っている。ここでは触れる余裕のなかった、ディシジョン・ルームの使用方法や、他の授業との連携等につき、私の意見を述べたり、他の先生方の御意見を拝聴できる機会を望みつつ、今回の報告は以上に止めておくことにする。

西ドイツの外国語教育界のいくつかの話題

ドイツ語学科　乙　政　　潤

1

外国語の授業について経験的に研究しようとする場合に、研究の進め方は究局的には次の二つの立場のうちのどちらか一つに分けられる。即ち、教育学上の問題をも自然科学におけると同じ正確さをモットーにして量的にはかりうる結果だけを手がかりに測定する立場と、精神科学ないしは人間科学の領域では主観的・感覚的な次元をなにからなにまで排除してしまうのは適当でないとして、前者の厳格な実証主義に反対する立場である。

この二つの立場には既に名が付けられていて、「科学イデオロギー」対「解釈イデオロギー」とか「客観的記述」対「主観的解釈」とかいう。或は、「相互行為的・量的メソッド」対「社会学的・人類学的・ミクロ記述人類学的メソッド」とも呼ぶ。

二つの立場は互に対して批判的であり、論争が行われていて、授業を経験的に研究しようとする者にとっては避けて通ることのできない隘路になっているようである。もっとも、当初に立場を決めてしまってから研究対象に向うことをせずに、逆に、まず問題の全体をなるべく詳しく眺めてから解決に役に立つ方法を両方の立場から選んで折衷せよと説く立場もある。

日本ではあまりこの方法論に関する論争は行われないようだが、授業に機器を利用する機会が増すにつれて、追々に二つの立場の対立は明らかになって行くであろう。

2

外国語授業の中で母国語を使うか使わないかも古くて新しい問題である。

西ドイツでは60年代は母国語を使わない教授法が強く主張されかつ広く承認された時期であった。ちなみにこの主義主張は „Einsprachigkeit“ と言い „direkte Methode“ とは呼ばない。この名称の中に含まれているのは „ein“「一」と „Sprache“「言語」であるから、つまりは授業中に一種類の言語しか――ということは習っている外国語しか――使わない態度を表しているのであろう。私はこれを「外国語専用主義」と訳しているが、果して適訳かどうか。

「外国語専用主義」は各州文部省の基本方針に採り入れられることによって「公認」となり、教科書を作る場合の指針となった。

しかし、70年代に入ると厳格な「外国語専用主義」に対する批判が始まった。それはしかし激しくそれを否定するというものではなくて、「啓蒙された外国語専用主義」と自称するとおり、授業中なるべく外国語を使うよう努めながらも或る段階では母国語を使うことを認めようという修正的提案であった。

或る段階とは、例えば抽象的な概念を説明する場合とか文法の規則を改めてまとめて見る場合である。

この提案は、「外国語専用主義」の「公理」と授業中に母国語を使った方が便利な場合がしばしばあるという「現実」の板ばさみになっていた多くの教師たちを「良心の悩み」から解放した。そして歓迎された。

「外国語専用主義」はいわゆる直接教授法的な行き方をするところから視覚資料を利用するけれども、「啓蒙された」修正提案は視覚資料の利用を万能視することに対しても批判的である。正確な概念を得るには母国語による説明が最も有効である場合が多いからだ。

3

テキストを読んで理解してから、そのテキストについて問答をするというのは言語の授業の普遍的なパターンの一つであろう。しかし、国語の授業の場合と外国語の授業の場合ではどこか違うのではないかと問われたら、どう答えたらいいであろうか。

確かにテキストの理解の段階で母国語の場合と外国語の場合とで質的な違いがあろう。しかしそれ以上に、問答をどういう目的で行うかによって二つの授業は大きく分かれる。

外国語の習得が問答する目的であると定めれば、問答はテキストに現れた語彙や語法や表現を覚え込ませる方針に添って作られる。けれども、ある内容についての自由なコミュニケーションが目的であるという立場に立てば、問答はテーマについても、登

（８Ｐへつづく）

外国語学習に対する意識調査と ＬＬ利用状況について

視聴覚資料係

昨年末３週間に亘って、視聴覚委員会と附属図書館視聴覚資料係が行った視聴覚教育（特に外国語の学習）に関するアンケートには、学生総数の約½（1572名）の協力を得た。マーク・カードの不備等々で視聴覚委員の方々、学生諸君に御迷惑をかけましたが、詳細の分析については、AV Journal 第３号に掲載しますが、今回若干の中間報告を行いたいと思う。

アンケート実施状況（中間報告）

82年12月11日現在

学生総数 3,382名／提出総数 1,572名(47.8%)

（Ｉ　部）	学生数	アンケート提出数(%)
中国語	218	133（61%）
朝鮮語	69	56（81%）
モンゴル	64	42（65%）
インドネシア	86	68（79%）
インドパキスタン	154	100（65%）
タイベトナム	106	67（62%）
ビルマ	67	47（70%）
アラビア	131	41（32%）
ペルシア	63	48（76%）
英語	267	161（60%）
ドイツ	115	90（78%）
フランス	153	32（20%）
デンマーク	65	39（60%）
イタリア	124	68（56%）
イスパニア	224	132（58%）
ポルトガル ブラジル	79	48（61%）
ロシア	217	81（37%）
計	2201	1253（57%）

（II　部）	学生数	アンケート提出数(%)
中国語	165	66（40%）
英語	375	97（26%）
ドイツ	151	66（44%）
フランス	167	16（10%）
イスパニア	174	1
ロシア	149	19（12%）
計	1181	265（22%）

外国語学習に対する学生の意識調査としては専攻語と英語に分けて次のようなアンケートを行った。

（専攻語）

ⓐ自分の専攻語について最も自信のない分野はどれですか？

会話	聞き取り	語い	発音
26%	20%	20%	9%
文法知識	連続	作文	読解
9%	7%	6%	3%

ⓑ自分の専攻語についてどの分野をのばしたいと思いますか？

会話	聞き取り	語い	発音
54%	11%	11%	5%
文法知識	読解	速読	作文
5%	5%	4%	4%

ⓒその分野の力を伸ばすために視聴覚資料を利用することは、どの程度有効だと思いますか？

大いに有効	かなり有効	やや有効	ほとんど効果ない	全く効果ない
36%	30%	21%	7%	5%

（英　語）

ⓐ自分の英語力についてはどの分野を伸ばしたいと思いますか？

会話	聞き取り	語い	文法知識
61%	11%	7%	7%
速読	読解	発音	作文
5%	5%	3%	2%

ⓐ伸ばすために視聴覚資料を利用したいと思いますか？

利用したい	利用したいと思わない
76%	13%

以上の結果より、多くの学生が専攻語・英語共に会話力をつけたいと望んでおり、そのためには視聴覚資料が有効だと考えている。

そこで、実際のL.L.自習室の利用状況についてはどうか。以下はその結果である。

ⓐ週平均どのくらいの日数L.L.自習室を利用しますか？

全く利用しない	1日	2日	5日程度	5日以上
61%	31%	8%	1%	0%

ⓑ1日の利用時間合計はどのくらいですか？

1時間程度	30分程度	2時間程度	10分程度	3時間以上
51%	20%	15%	13%	1%

従って、多くの学生が視聴覚資料が有効だと考えているにもかかわらず、実際には半数以上の学生が利用していないわけである。しかしながら、こういう結果に至った原因の一端は視聴覚資料室、L.L.自習室の不備にもあるのではないかと考えられる。

（L.L.自習室の改善について）

ⓐ現状のテープ貸出システムに満足していますか？

満足している	満足していない
50%	49%

ⓑ次のどれを要望しますか？

ビデオライブラリーの充実	テープライブラリーの充実	ブースの増設
32%	28%	20%

テキストの整備と充実	ブースの仕切を高くする
15%	4%

ⓒ次のどれをふやすことを要望しますか？

専攻語のテープ	ビデオ	音楽のテープ
38%	30%	17%

英語のテープ	専攻語・英語を除いた言語のテープ
11%	5%

これらのアンケート調査では、我々が常日頃感じていることが結果として顕著にあらわれているように思われる。例えば、それが専攻語に関する教材の充実であり、さらには最近特に目立つビデオ教材の充実を望む学生の声である。専攻語に関する教材については極力入手しようと努力しているのだが、資料購入のための予算の問題、あるいは本学の特色でもある特殊な語に関しては資料・教材の絶対数が少ないためやむをえず現状に至っているわけである。今後もより充実させてゆく予定ではあるが、新しい教材作成に関しては本学の諸先生方の活躍に大いに期待するところである。そのためには我々も極力協力させていただく覚悟である。又、ビデオ教材については、本学でビデオを設置して歴史が浅いため、不満も多いと思われる。現在できる限りの多くのビデオ教材を製作中ではあるが、それでも実際にはビデオの数はまだ少ないし、学生が利用できるビデオコーダーが少ないことも事実なのである。今後はこういった点を改善すべく努力していきたい。しかしながら、その改善のためには学生諸君の協力なくしてはできないのである。

この協力とは、すなわち、学生諸君の自発的な学習意欲であり、平素からのL.L.自習室の利用なのである。最近では、L.L.自習室の利用者が増えたとはいえ、我々にはまだまだ少ないように思われる。学生諸君の熱心で、有効な利用を望んで止まない。最後に願わくば、これからも学生諸君の意見を我々の仕事に反映していきたいので、今後も諸君の生の声を聞かせてもらいたい。視聴覚教材に関して要望・疑問・不満があればどしどしカウンターまで言ってきていただきたいし、幸いL.L.自習室にはリクエストボックスも設置してあるので有効に活用していただきたい。

—6Pよりつづく—

場人物についても、問題性についても作られなければならない。国語の授業ならこのことは差支えなく行われる。

このように、テキストについて問答の位置づけについても、上のような二つの立場から主張がなされ、論争されているように見受けられる。他の二点とともに、我々も又自身の立場を一度そこに照らして見るのも無意味ではあるまい。　(1983.2.25)

視聴覚教材解題—ドイツ語—

ドイツ語学科　友田舜三

・L.L. 教材の可能性と限界

最近、外国語教授の目標として、「コミュニケーション能力の獲得」という表現がさかんに用いられるが、その意味するものを、単に、ネィティブ・スピーカーの発音、ジェスチャーなどの模倣と解釈すべきではない。というのは、コミュニケーションの行なわれる場はあくまで現実世界であり、異文化接触の場であるから、政治的、経済的、文化的、心理的矛盾に満ちている。又、我々が外国語を学習するのは、外国人になりきるためではなく、自国や世界を見る視点を獲得し、自国の現象や問題を外国語で伝達したり、又逆に、外国の問題を自国に紹介するためである。まさにこのような矛盾に満ちた世界を認識し、論議することをも含めて、「コミュニケーション能力」をとらえる必要があろう。

ところが、このような批判的省察を含むコミュニケーションは、現実に外国人とのいろいろな衝突や相互理解を経験してこそ可能なことであり、それを視聴覚教材に期待することはできない、そこに一つの限界がある。しかしこの限界を承知したうえで活用するならば、視聴覚教材は、この上ない良き助けとなってくれる。以前の、いや現在も依然として続いている、受動的に文字を読み、訳すことのみにエネルギーを使う方法では、実際の国際的コンタクトの場ではオロオロしてしまう人間ばかりが生み出されてきたが、それを打ち破るためにも、とにかく必要な基礎は、音声・イントネーションの訓練であり、これには、現在の条件下では、L.L. 教材が最も適している。議論したくとも、発音器官や文法パターンが十分訓練されていなければ、そちらに注意力が吸いとられ、意見を述べるどころでなくなってしまう。コミュニケーションの心理を解放するためにこそ、発音・聞き取り能力、文法パターンの訓練は、どうしても避けて通れないのである。

では次に、実際にいくつかの視聴覚教材を検討してみよう。

・教材紹介

① Deutsch 2000.（Hueber Verlag München）
② Basic spoken German （ランゲージ・サービス社）
③ 生きた初級ドイツ語（文林書院）

<Deutsch 2000> は1972年に初版が出たもので、標準日常ドイツ語の習得が目標となっており、文構造、語彙(2000語)、テーマ、カセットの明瞭でナチュラルな話し方などから評価すると、現在最も秀れた教材の一つと言える。三巻の挿絵入りテキスト、カセット、スライド(授業用)から成り、カセットは、本文朗読、ポーズ入りの朗読、練習問題（１課につき10～15セットの応答練習）を含んでいる。テーマは、第一巻のいわゆる survival situation にはじまり、ドイツ人の日常生活がとりあげられ、第二巻以後は、ドイツの家庭、社会、技術時代の諸問題などがとりあげられている。文体も、ダイアログ、討論、物語り、新聞記事など、さまざまなジャンルにわたっているので、三巻全部をこなすと、新聞・雑誌を読む基礎力もつく。現代ドイツ語を学ぶ教材として信頼し、全てを覚えるつもりで進めばよい。参考までに、この第一巻は、日本語訳付の版が出ており、自習用には便利である。
(Deutsch 2000. 初級ドイツ語・会話と文法。日本放送出版協会)

次に、<Basic spoken German>の特徴は、①目標を日常会話に必要な、話し聞く能力の修得にしぼっていること、②そのため、構成は、基本的ダイアログに基づくパターンプラクティス（置き換え、言い換え、応用変形)、語彙練習、翻訳、応答、会話、読本などから成り、あるテーマに関する語彙・文型などを徹底的に覚え込むよう作成されていることである。ただ、扱われたテーマは、現代ドイツのアクチャルな問題とは関係のない日常的スモール・トークに終っている点である。

上記の二教材は、秀れてはいるが、量的、質的に

かなり高い水準を要求しており、かなりの根気と熱意を必要とする。そこで、もう少し基本的なレベルで確実な基礎力を身につけたい人のためには、**<生きた初級ドイツ語>**（田中康一・乙政潤、文林書院）が良いであろう。5巻のテキストとカセット、学習の手引きから成る。挿絵をもとに文を作り、変形してゆくという一貫したプログラムをもった構成で、文法的知識が単なる知識におわらず、実践化されるように配慮されている。このように実際に耳と口を用いて機能的に修得した文法や文章は、忘れにくく、応用がきき、確実な力となってゆくことであろう。良い教材はすでにあり、学生のみなさんの潜在的能力もある。となれば、残る問題は実際にやるかやらないかである。

視聴覚教材解題—英　語—

英語学科　大　橋　克　洋

今回紹介するのは、BBC制作のVideo Tapeシリーズ〝People You Meet〟である。有名な「英語慣用調査」計画主任で、大著*A Grammar of Contemporary English*の著者 Randolph Quirk を語学顧問とする信頼度の高い視聴覚教材であり、大学教養課程向きである。現在視聴覚教室にそろっているのは、Unit 1：*The Painting*, U.2：*Fog*, U.3：*The Party*, U.4：*Going on Holiday*, U.5：*An Englishman's Home*（筆者による便宜的配列）の5巻であるが、難易度に多少の差がある。U.1が最も解り易く、ついでU.2、U.3、U.4がほぼ同列に並び、U.5は他よりもやや難しくなっている。各ユニットとも中流イギリス人の日常的経験を題材にした15分間の物語に仕立てられている。

ストーリーが面白く、リアリスティックであることがこのシリーズの魅力の源泉である。15分間視聴者を飽かせず、また何度でも視聴したいという気持ちをおこさせる。日常卑近な出来事を扱っているため、誰もが登場人物達の中に自分を投影させることができる。内容が「面白い」ことと「現実的」であることは、すぐれた語学教材にとって基本的なことであると言えよう。ストーリーのいまひとつの特徴として、どのユニットにもsurprise endingが設けられていることを付記しておく。

さて使用されている英語のレヴェルから言って、これは明らかに外国人英語学習者用の中級教材であり、そのための条件を備えていることは言うまでもない。先ず発話速度や使用される単語、表現に手加減が加えられている。が、それは決して極端でなく、わざとらしさを感じさせない。むしろ、よい英語を話すために必ずしも難しい語句を知っている必要はないということを教える意味で、われわれnon-native speakers of Englishに、とるべきひとつの方向を指し示すものだと言ってもよい。

次に、各ユニットはそれぞれ特定の表現パターンを集中的に使用している。具体的に言えば、'Can, could; may, might'for ability, permission, possibility(U.1), Not much, a lot of, a few, not many, etc.(U.2), Expressions of purpose(U.3), Word order with adverbs of frequency and manner(U.4), 'Used to'for past habit(U.5)となっている。前半6分を経過すると約3分間のブレイクがあり、前半部に現われたkey expressions(つまり、そのユニットが特集しているexpressions)が反復される。そこでは更に発話速度が落とされているので、聴解の不備を補うことができる。しかるのちに後半に進むことになる。

以上のような「教育的配慮」からはっきり言えることは、これをヒアリング教材のみにとどめてはならないということだ。comprehensionのためのものであると同時にreproductionを目指したものでもある。そのためスタンダードなspoken Englishが用いられており、日本にいても、キャンパスで、街で、あるいはバスの中で使わなければならないような、また使いたくなるような表現に満ちている。そこで、この教材の有効な利用法をひとつだけ紹介してみる。

(1)先ず、ストーリーを追うために１～２回視聴し、同時にカセット・テープに録音する、外大一年生で、１度ないし２度かけて、なおかつストーリーの流れがつかめないものはU.５だけであろう。この時、前述のsurprise endingを目やすにするのも一法である。そこで笑えれば内容把握に成功したものと考えてよい。(2)次に、登場人物（たいてい５～６人）のうち誰か一人を選んで、その発話を順にすべて書き取ってみる。何度も聴き返さなければならないのでカセット・テープを使うのが便利だ。(3)人物を変えて、もう一人に関し同様にその発話を書き取る。(4)視聴覚教室で、全体の正確なtranscriptを見せてもらい、自分の書き取ったものを点検する。間違いを訂正したり、どうしても聴き取れなかった部分を書き込んでいく過程の中からヒアリングのコツが身についてくる。(5)次は、着目した２名につき、それぞれ順にその発話を声に出して後づけてみる。この練習を何度も繰り返し、モデルの発音とイントネーションに極力自分のそれらを近づける。(6)最後に、発声練習をした２名の登場人物の発話を全部覚える。というより、(5)の結果として自然に(6)に到達しているというのが望ましい。

(1)～(4)はcomprehension、(5)～(6)はreproductionの練習と、一応分けることができるが、それぞれに関しひとつずつ忠告（ないしは動機づけ）を行なっておきたい。先ず前者について。「文学鑑賞は、それ自体ひとつの立派な創作である」とは上田敏の言葉だが、外国語のcomprehensionについても当てはまる。入ってくるものをただ受けいれるという態度では、聴き取れる量に限度がある。文脈や情況から判断して、次に語られるべき英語を予想したり、文法や語法の知識を総動員して、目下語られている英語を頭の中で追跡してみるという聴き手側の積極的な働きかけが是非必要である。一例を挙げれば、U.４にIs that the all, sir? と聞こえて仕方がない文章が出てくる。しかしこうであるはずがないことを文法常識が教え、更に情況判断がWill that be all, sir? と訂正させる。そして聴き直してみると、ちゃんとWill that be all, sir? と聞こえるのである。人間の感覚とはあてにならないものだ。まして外国人であってみれば。

reproductionに関して言えば、私は最近上記(5)、即ちparrotingの重要性を痛感する。初級中級段階における発音練習の質と量がその人の英語的一生を決めるとさえ言って言い過ぎではないと思う。できるだけ早めに「英語の舌」を作り上げるのがよい。英語を発音したり英文を音読したりすることに苦痛を覚えなくなり、やがて楽しくなる。いつまでもそれに苦痛を感じる人との英語力の差は年を追うごとに開いていくであろう。

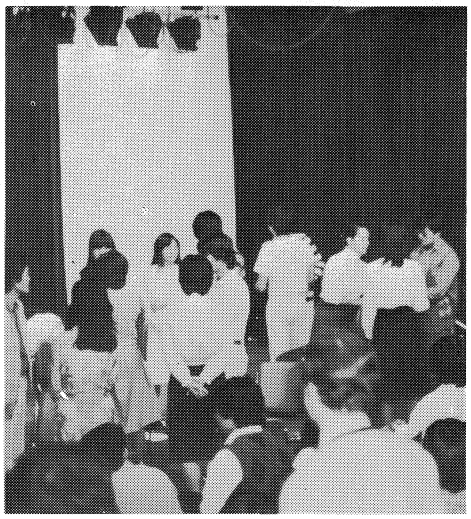
最後に、こだわるべきことではないが、本教材はイギリス英語によっている。目立つほどではないにしてもBritishの特徴はやはり現れている。syntax面では、所謂「haveの助動詞扱い」がある。

U.２：… Have you anything to declare?
（何か申告するものがございますか。）
… Yes, I have.
（はい、あります。）

（American では、… Do you have anything to declare?—①
… Yes, I do. —②）

ちなみに、イギリス人には、①に対するよりも②に対する心理的抵抗が強いようだ。蛇足ながら、(Britishの特徴というのではないが、)語法研究者の注意を惹きそうな英文がところどころに挿まれているのはいかにもQuirk教授らしい。

発音に関しては、can't, either, tomatoなど個々の単語の発音の他に、what, whereやfor, beforeなどにおける米語音との差、Not at all.（U.２）Shut up.（U.２）などで、[t] が弾音化せず、そのまま保たれるという英語音の特色等に気づくことも楽しい。



〈スタジオでの授業風景〉

語劇録画撮りについて

期間　1982年11月４日～12日
録画希望語科；ペルシア語、インドネシア語、モンゴル語、Ⅰ部英語、
Ⅱ部英語シェイクスピア自主講座（計５科）

（昨年度　1981年11月10日～17日
録画希望語科；スペイン語、中国語、ペルシア語、
英語、Ⅱ部ロシア語（計５科））

昨年に引き続き語劇のビデオ撮りを行なった。前前より学生から希望がでていたため、語劇実行委員会を通じて全語科に通知したが、録画希望語科が、今年も昨年同様５科というのは予想以上に少ない数だった。

学生側からは、語劇の本番ビデオ撮りを希望しているようであったが、照明・機器の関係上、移動は不可能で本番一週間前のリハーサルを本館のスタジオで録画撮りを行った。現場では、学生達が想像以上に真剣に取組み、協力的であったように思われる。学生が考えていた以上に録画時間がかかり、平均６時間位で非常に疲れた様子だったが、昨年以上にりっぱな語劇テープが作製でき、今後の語劇作りに多いに役立つものと考えられる。我々の反省点としては、録音設備にいささか不備があったように思われ、今後の検討材料として考えていきたいが、今年度と来年度の特別設備費で高性能のビデオ機器の購入を考えており、来年度からの語劇録画は、多機能を駆使したすばらしい画像と録音が出来ることが約束できるであろう。

〈スタジオでの語劇録画風景〉

テープライブラリー利用者統計
('81.1.～'82.7.)

総テープ数 7010 本（語学・音楽6539本，ヴィデオ368本，雑誌103本）
総利用回数 4579 回（語学・音楽3642回，ヴィデオ890回，雑誌142回）

（語 学・音 楽）

	分類(各テープの総数)	総利用回数	1 （各利用回数）	2 （各利用回数）	3 （各利用回数）	4 （各利用回数）	5 （各利用回数）
1	英　　語(2230)	989	Spoken American English (Adranced Corrse) (72)	As You Like It (61)	リンガフォン 米語　中級コース (43)	Listening and Learning in English (35)	Spoken American English (Intemediate Course) (28)
2	フランス語 (680)	779	Basic Spoken French Elementary Course (310)	Basic Spoken French Beginner's Course (186)	La France en Direct 1 (45)	La France en Direct 2 (44)	シャンソン名曲大辞典 (10)
3	ロシア語 (436)	551	Учебник русского Языка 1, 2 (Баш) (130)	Звуки и интонация Русской речи (62)	Говорим по-русски (39)	ＮＨＫ　ロシア語入門 (第二版)発音・基本文型 (17)	ＮＨＫ　ロシア語 《歌と詩》 (12)
4	イスパニア語 (460)	264	Modern Spanish Third Edition (112)	Curso de español (30)	ＮＨＫ スペイン語入門 発音・基本文型 (16)	Modern Spanish Second Edition (11)	Basic Spoken Spanish Part 1 (11)
5	日　本　語 (217)	240	Japanese for Today (192)	Intersive Course In Japanese Elementary (10)	An Introduction to Modern Japanese ((9)	Japanese for Beginners (6)	Intersive Course In Japanese Intermediate Course (4)
6	ドイツ語 (595)	228	Deutsch 2000 I (45)	Deutsch 2000 II (35)	Basic Spoken German Part 1 (19)	20 Jahre Bundesrepublik (5)	Musik des Mittelaters (3)
7	ポルトガル語 ブラジル (49)	160	Linguaphone Português Contemporâneo (141)	Brazilian Portugnese Conversational Course (3)	ブラジル・ポルトガル語の入門 (3)	ＡＢＣからの 実用ブラジル語会話 (2)	The Moden Method Portuguese (1)
8	中　国　語 (653)	131	ＬＬ中国語 初級 (16)	ＮＨＫ 中国語入門 発音・基本文型 (14)	北京語言学院 口語材料 (13)	基礎　中国語 (12)	ＬＬ中国語上級 (8)
9	音　楽　編 (268)	151	バリ島のガムラン音楽 (8)	ロシアの音楽 (5)	Folk Music of SPAIN (5)	郷愁のしらべ クロチョン音楽 (4)	大英原にこだまする バラライカのしらべ (4)
10	イタリア語 (151)	59	Italian Conversa-phore's Modern Method (6)	Italiano Linguaphone Curso Di Conversazione (6)	Italian Conversa-phone's Round-The-World (4)	Linguaphone Italian Travel Cassette (4)	現代のイタリア語入門 (4)
11	西洋諸語 (194)	31	Jezyk Poliski (8)	Teach yourself Czech (6)	Greek (6) Holt spoken languge series	スウェーデン語の入門 I (2)	Aaltio (1) Finnish for Foreigners 1
12	デンマーク語 (79)	23	Lær at Tale Dansk (15)	H.C. Andersen Eventyr (3)	Lyt & Lær, Dansk øvelse (2)	Danish Prouunciation Spoken Extracts from Essentials of Danish Grammer (1)	Folk og Røvere I Kardemomme By Div. Kunstnese (1)
13	アラビア語 (86)	14	Arabic Linguaphone Arabic Conversational Course (4)	An Introduction to Modern Arabic (2)	Lesson in Contemporary Arabic (2)	Linguaphone Arabic (2)	Spoken Iraqi Aradic (1)
14	タ　イ　語 (24)	13	標準タイ語教本 I (7)	タイ語の話し方 (5)	実用タイ語会話 (1)		

	分類(各テープの総数)	総利用回数	1 (各利用回数)	2 (各利用回数)	3 (各利用回数)	4 (各利用回数)	5 (各利用回数)
15	ウルドゥー語 (72)	12	Kassete Kahani (4)	Urdn Poetry (2)	ウルドゥー語入門 (2)	Meri Pasand-Ferida Khanum (2)	Ghazals-Shaukat Ali (1)
16	ペルシア語 (162)	10	Tārīkh-e Iran (4)	Moden Persian Setions (1)	ペルシア語入門 (1)	Bani Sadr の演説 at Shirāz (1)	インタビュー 〝学生生活について〟 (1)
17	ヴェトナム語 (40)	9	FSI Basic Course Vietnamese : Adranced (4)	FSI Basic Course Vietnamese (3)	FSI Basic Course Vietnamese : Guide to Pronunciation (2)		
18	東洋諸語 (51)	7	Linguaphone Hebrew Course (4)	Linguaphone Swahili Course (3)			
19	朝鮮語 (45)	5	例文活用 韓国語 (3)	朝鮮語の基礎 (1)	韓国文化財全集 1 (1)		
20	インドネシア語 (33)	3	Bulan Dagoan (2) The Indonesian Music	Bunji Kata Kata (1) Bahasa Indonesia			
21	ヒンディー語 (14)	2	HINDI Principl Language of India Conversa-phone's Rourd-The-World (2)				

(ヴィデオ) 890回

1	英語 (54)	715	大草原の小さな家 (74)	アメリカン・グラフティ (47)	ローマの休日 (44)	グリース (43)	ある愛の詩 (37)
2	日本語 (304)	89	ニュースコープ ゴダイゴ・イン・チャイナ (8)	敦煌〈シルクロード〉(6)	ティファニーで朝食を (日本語) (6)	井上陽水スペシャル (5)	征服者の光芒～ヒトラー～ 〈NHK歴史と文明〉(4)
3	フランス語 (7)	55	太陽がいっぱい (32)	愛よもう一度 (10)	ブーメランのように (7)	モンパルナスの灯 (5)	道づれ (1)
4	イタリア語 (1)	19	続・青い体験 (19)				
5	中国語 (2)	12	ふたごの兄弟 ((9)				

(雑誌) 142回

1	English Journal (62)	107	No.12 アメリカを食べる (13)	No.11 英語のTPO (9)	(別冊) No.1 資格試験の上手な利用法 (3)	(別冊) No.2 全地球的英語放送案内 (8)	(別冊) No.3 辞書の選び方・使い方 (8)
2	時事英語研究 (25)	20	No.7 外人教師のすすめる英語学習法 (5)	No.6 英語の新聞・雑誌を読むコツ (4)	No.4 英語力診断テスト (8)	No.5 〈特別対談〉ビジネスマンの英語戦略 (3)	No.8 最新アメリカ情報 ―言葉と生活― (2)
3	Business View (16)	15	No.5 崩壊!? 日米欧コミュニケーション (5)	No.6 なぜ、怒りをこめて日本をふり返る? (4)	No.3 どうつきあう? カナダ・オーストラリア (2)	No.7 羨望とプライド ヨーロッパの声 (2)	No.2 日本でみつけた アメリカビジネス魂 (1)

（語学・音楽テープ）

順位	語科名	利用比率
1	英語	27.1%
2	フランス語	21.3%
3	ロシア語	15.1%
4	スペイン語	7.2%
5	日本語	6.6%
6	ドイツ語	6.3%
7	ポルトガル語ブラジル	4.4%
8	中国語	3.6%
9	音楽編	3.2%
10	イタリア語	1.6%
11	西洋諸語	0.9%
12	デンマーク語	0.6%
13	アラビア語	0.3%
14	タイ語	0.3%
15	ウルドゥ語	0.3%
16	ペルシア語	0.2%
17	ベトナム語	0.2%
18	東洋諸語	0.2%
19	朝鮮語	0.1%
20	インドネシア語	0.1%
21	ヒンディ語	0.1%

順位	語科名	語科別利用指数
1	ポルトガル語ブラジル	3.27
2	ロシア語	1.26
3	フランス語	1.15
4	日本語	1.11
5	スペイン語	0.57
6	タイ語	0.54
7	英語	0.44
8	音楽編	0.43
9	イタリア語	0.39
10	ドイツ語	0.38
11	デンマーク語	0.29
12	ベトナム語	0.23
13	中国語	0.20
14	ウルドゥ語	0.17
15	アラビア語	0.16
16	西洋諸語	0.16
17	ヒンディ語	0.14
18	東洋諸語	0.14
19	朝鮮語	0.11
20	インドネシア語	0.09
21	ペルシア語	0.06

順位	語科名	学生数	テープ充実指数
1	ペルシア語	60	2.70
2	ドイツ語	250	2.38
3	フランス語	290	2.34
4	中国語	350	1.87
5	デンマーク語	60	1.32
6	スペイン語	350	1.31
7	イタリア語	120	1.26
8	ロシア語	350	1.24
9	朝鮮語	60	0.75
10	タイ語ベトナム	100	0.64
11	インドパキスタン語	140	0.61
12	アラビア語	140	0.61
13	ポルトガル語ブラジル	80	0.61
14	インドネシア語（除く英語）	80	0.41

（ヴィデオ）

順位	語科名	利用比率
1	英語	80.3%
2	日本語	10.0%
3	フランス語	6.2%
4	イタリア語	2.1%
5	中国語	1.3%

順位	語科名	語科別利用指数
1	イタリア語	19.00
2	英語	13.24
3	フランス語	7.86
4	中国語	6.00
5	日本語	0.29

（雑誌テープ）

順位	雑誌名	利用比率
1	English Jounal	75.4%
2	時事英語研究	14.1%
3	Business View	10.5%

順位	語科名	語科別利用指数
1	English Jounal	1.72
2	Business View	0.94
3	時事英語研究	0.80

〈出版物案内〉

1982年９月以後に出版された、語学テキスト(スライド、ビデオテープ or 録音テープ付)、目録、論集等は以下の通りです。これらの出版物は「大学教育方法改善」「視聴覚教材開発」等のプロジェクトによるものです。

・スライド目録 －ドイツ文化史編－
（古代よりバロックまで）　布施俊夫編

・フランス人の身ぶり辞典
共著　大木　充、ジャン・クロード・ロシニュ

・視聴覚外国語教育研究 第５号

ビルマ語書き取りテストに見る誤答例の分析
南田みどり

コミュニケーション練習としての設問形式のL.L.練習
－挿絵の効果に関連して－　乙政　潤

イタリア語の単語アクセント、文アクセント、肯定・疑問のイントネーション、感情表現の聞き取り
郡　史郎

一般音声学テープ教材 －子音編・閉鎖音－
福居　誠二

ドイツ文化史のスライドづくり　布施　俊夫

「トルコ語教本」作成を終えて　勝田　茂

編集後記

◇１月発行予定の今号も２カ月遅れてしまいました。ＡＶジャーナルとは何ぞやとよく聞かれますが、Audio Visual の略語であることぐらいは認識してもらわないことには。

◇昨年末に行った視聴覚教育に関するアンケートは学生諸君のおかげで、今号にあるような中間報告がまとまりました。〈テープライブラリーの利用者統計〉に明確に表われているように、利用比率（全使用総数に対するその言語の使用数)はやはり、英語、フランス語、ロシア語が圧倒的に高く、利用指数（各語学保有テープに対する各語学の利用数）はというと、ポルトガル・ブラジル語、ロシア語、フランス語、日本語が高い指数になっています。又、参考のために充実指数（学生数に対する各語学保有テープ数）を計算すると、ペルシア語、ドイツ語、フランス語、中国語の順になっています。
さらに、各語学の利用順位を見ても分かるようにアンケート結果と同様の〝会話〟力をつけたいと考えている学生が多いことが分かります。
これらの利用者統計は今後の視聴覚教育活動の発展、充実のために大いに活用していくつもりです。

◇最近では、コンピューターを知らずんば人にあらずの時代だと言われていますし、ＬＬ機器にも導入されています。今回のアンケートや利用者統計もコンピューター処理をしたのですが、コンピューターをも〝自然〟なものとして我々の内に組み込んでいかねばダメなのでしょうか。

◇フランス語学科４回生の林稔君には一年間ＬＬの仕事を手伝って頂きました。感謝しています。
卒業生のみなさん、ＬＬを利用されなかった人でも、テープライブラリーについて何かあれば御連絡下さい。

◇表紙の写真は本学フランス語学科客員教授のロシニュ氏です。

◇次号の発行は５月を予定しています。多くの方々の寄稿、ご意見をおよせ下さい。

（Ｈ．Ｋ．）

ＡＶ　Journal　―第２号―

1983年３月24日発行

編　集　大阪外国語大学視聴覚教育委員会
附属図書館視聴覚資料係
発　行　大阪外国語大学
印　刷　㈱ムラタ印刷